

空崎ヒナは、最近行方不明者が多発していると言われているスポットに訪れていた。レンガ造りの大規模な建物と洞窟を組み合わせたようなそこは、恐れも込めて「ダンジョン」と呼ばれているらしい。行方不明者の捜索が万魔殿からヒナが任された任務だった。

「まったく、めんどくさい」

ヒナはボソッとつぶやいた。普段は心の中に留めておくはずのその言葉がつい口から飛び出たのは、誰もいないからである。風紀委員会の皆はそれぞれ別件に当たっており、ダンジョンの調査はヒナひとりで担当することになったのだ。しかし、ひとりの方が気を使わなくてよいからむしろ気楽でいいかもしれないとヒナは思い直した。

ブブブとポケットに入っているスマホが振動する。見ると、シャーレの先生からの連絡だった。「ヒナちゃん、お仕事頑張ってるね。仕事が終わったら前に気になっているって言ってたイタリアンに行こう。楽しみにしてる。」

先生からのお誘いにヒナは表情をほころばせた。「ありがとう、私も楽しみにしてる」と、すぐに返信する。先生とは定期的に食事に出かける仲である。仕事ばかりの毎日の中で先生との食事や会話はささやかな息抜きになっていた。すっかり気を取り直したヒナはダンジョンの入り口にたどり着いた。石造りの重々しい扉は、小柄なヒナを拒むかのように立ちふさがっている。だが、その見た目に反してその扉はスッと開いた。ヒナは躊躇なくコツコツと足音を立てながら進んでいく。その後ろで、バタンと大きな音がして扉がひとりで閉まった音がした。

「閉じ込められた!？」

扉の方を振り返った瞬間、ヒナの身体に変化が起きる。銃を構えようとするが、それすらも叶わない。

「.....♡♡♡!？」

自分の身体が熱くなるのを感じたヒナは、思わず声にならない悲鳴をあげた。今までにない身体の状態に自分の身体をぎゅっと抱きしめる。しかし、熱は収まらない。

「なに、これ...♡」

その疑問に答える者はいない。

ダンジョンは彼女の来訪を心待ちにしていた。ダンジョン、正式な名称は「エロトラップダンジョン」。女性を狂わせ壊す、魔のダンジョンにヒナは足を踏み入れてしまったのだ。

ヒナが立ち入った、玄関入ってすぐの部屋には媚薬ガスが充満している。

「フーっ♡フーっ♡」

ヒナの熱い吐息がこぼれる。荒っぽいその息は発情した獣のようである。

「身体が熱くておかしくなりそう...」

そうつぶやくヒナの声も色っぽくなっている。

「んっ...♡」「あ、、♡」

意図せず漏れ出した声が、定期的にダンジョンの中で響き渡る。その反響音もまたヒナの羞恥心を煽る。

「我慢...♡我慢...♡」

何を我慢すればいいのか、どうすればこの熱が引くのか、ヒナにはあまり分かっていなかったが、前に進むしかないことだけが決まっていた。ひんやりとした壁に手をつきながら、少しずつ

歩き出す。

「はぁ♡」

収まらない熱に、ヒナはせめてものと思い、いつも着ているコートを脱いだ。それだけでは身体の熱が引くわけもなかったが、しかし、コートについている風紀委員会の腕章が目につき、仕事を遂行せねばならないという目的を思い出していた。

「なんなのかしら、このダンジョンは。とにかく前にすすまなければ...ん♡」

ヒナは眉をひそめつつ、ダンジョンの正面をにらんだ。身体の火照りに耐えながら歩くうちに、次の扉の前に来ていた。扉は玄関と同じく、装飾も何もないシンプルなつくりをしている。前に進むしか選択肢はない。ヒナは先ほどと同じように扉を開こうとした。

しかし、扉は開かない。

「えっ」

入り口の扉と打って変わった反応に、ヒナ思わず声をあげた。しかし、依然として扉の反応はない。よく見ると、扉の真ん中に何やら文字が書いてある。暗号かのように思われたが、書かれていることは単純なことであった。

「オナニーせよ」

その文を読み上げて、ヒナは何を要求されているかようやく気付いた。ただでさえ火照っている顔がさらに赤くなる。朝から晩までの激務のなかで自慰行為を行ったことは数えるほどしかない。それを、今。しかし、媚薬ガスの効果であろうか、ヒナの頭は既に冷静さを欠いていた。そっと服の上から胸を揉む。

「ふっ...♡」

ヒナの胸は、まわりの学生と比べるとささやかな方であったが、しっかりと揉むことができるほどにはある。銃を床に置き、両手で揉みしだく。服とブラジャーの上から乳首を探し出し、親指でそっと撫でる。

「ふぁ♡」

我慢できなくなっ、服のボタンをはずす。ダンジョンの中はひんやりとしているが、媚薬ガスのおかげで寒さを感じることはない。むしろ服を着ている状態では不快なほどである。服を脱ぎ捨てると、すっと引き締まった身体が露わになる。黒のシンプルなブラジャーは、陶器のような白い肌をより際立たせていた。ブラジャーの隙間から指を差し入れ、乳首にそっと触れる。

「ああ♡」

それだけで今までにない衝撃がヒナの身体に走った。触るたびに、熱はさらに増していく。

「んん...♡気持ちいい♡」

ビリビリと身体中を快感が駆け巡っていく。このままではおかしくなってしまうかもしれない、という思考は脳裏をかすめ、消え失せた。ヒナの手はどんどん早く、激しくなっていく。いつもだったら途中でやめてしまうような強い刺激。それを上回る媚薬ガスの効果が、ヒナの身体を早くも壊してしまっていた。

「っ~~~~♡♡♡♡♡」

声を押し殺したのは、誰がいるかも分からないダンジョンの中であることを直前で思い出したからである。しかし、勢いは止まらず、ヒナは乳首オナニーでイってしまった。息を整えて服を

着直したヒナが扉に手をかけると、扉は何もなかったように開いた。そしてまた、ヒナは次のト
ラップへと進んでいくのであった。